

レポート

うんちくがんちく舞台裏

酪農学園大学 石井 智美

北海道といえば、広大な自然が連想され、そこに白黒のウシが点景となるイメージです。ですが今このウシが泣いています。

オーストラリアからの農産物輸入の圧力、バイオエタノールの原料として需要が増えたことによる止まらぬ飼料の高騰。それらは北海道の基幹産業である酪農を直撃し、酪農の存続が大きな問題になっています。

さらには食に関する偽装、農薬の混入など食に関する問題が、次から次へ根本的な解決がなされないままです。

そこには、食糧の自給率に鈍感だった政府の姿勢と、それに疑問も感ぜずに世界の食糧を求め、人類史上例を見ない多様な食材が購入可能な、飽食状態の中にいますが、肥満を抱えながらも満たされているという気持ちはなく、更には十分食べることが可能な食品が賞味期限の名のもとに捨てられているのが日本です。ガソリンの高騰の背後にも、食糧問題が関わっています。

このままではどうも上手くいかないということに気がつかざるを得ません。出来ることから少しでも変えていく方策を考えることが今求められています。

今私の研究室では牛乳について北海道ならではの活用について検討しています。牛乳は超高齢社会の到来にあって、医療費削減、予防のための食品として有効です。購入後、そのまま飲めば良い食品なのでから。この加工も調理もいらない栄養源としての簡便さを考え、牛乳からの栄養摂取に関する知識の伝達方法として、どの程度の量のカルシウムを、どのように摂取をすると良いかを、広く知ってもらう必要があります。20代の酪農学園大学の女子学生のデータですが、1日、乳製品由来のカルシウムを800mg摂ると、2ヶ月後には骨に蓄積するカルシウムが増えることが生化学的なデータから分かりました。更には日常的にこまめに体を動かすことが、効果を増すことも明らかになりました。骨粗しょう症の予防には、若い頃の食生活が重要なのです。

北海道新聞の土曜日の朝刊コラム「うんちくがんちく」に日本人と乳・乳製品の関わりについて、科学的見地、文化人類学的見地からの連載をしました。幅広い年齢の人が対象の連載は、書き手にとって楽しいものでした。研究者として、研究内容を、社会へ様々な形で還元していくことが今、必要であると感じています。

